

プリズン文学としての『天路歷程』 — 投獄と解放の記録

高野美千代

The Pilgrim's Progress and Seventeenth-Century Prison Literature

TAKANO Michiyo

Abstract

This study considers *The Pilgrim's Progress* as a record of John Bunyan's spiritual struggle during his imprisonment, and positions it as representative of seventeenth-century English prison literature. Bunyan was influenced by John Fox's martyrology, but he used his own unique method to portray those who were imprisoned. For example, rather than writing about imprisoned characters who suffer and lose their lives to religious persecution and portraying them as heroes, in the City of Vanity, he raises his voice against the persecutors and declares his opposition to them. Thus, Bunyan's prison literature is not only a lesson or warning to the reader, but it can also be read as a protest against the religious persecution of his time. It conveys to the present day a picture of the faithful in seventeenth-century England who did not succumb to spiritual oppression or physical bondage.

キーワード：プリズン文学、ジョン・バニヤン、『天路歷程』、バプテスト

key words: prison literature, John Bunyan

はじめに

王政復古期の1660年代にジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-88)は獄中において『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*)第1部の執筆を始めた。この作品は、1678年に出版されて以来、3世紀以上にわたって世界中で幾多の言語に翻訳され受容されてきた。本論考では、『天路歷程』を、身体と魂における投獄と解放のための闘いの記録ととらえ、17世紀英国プリズン文学(prison literature)を代表するものと位置付ける。その時代ならではの宗教的政治的背景の影響下において生まれたものであるこの作品は、17世紀プリズン文学における圧倒的な普遍性を持つ作品であり、本論考ではその要素を検証する。

As I walked through the wilderness of this world, I lighted on a certain place where was a den, and I laid me down in that

place to sleep: and as I slept, I dreamed a dream.

これが『天路歷程』第1部本編の書き出しである。語り手が降り立った場所"den"は、"gaol"(牢獄)すなわち「プリズン」のことを指す。『天路歷程』は、語り手が眠りに落ちて夢を見て、その内容が語られるという、寓意夢物語の形式をとる。著者バニヤンは不法な宗教的活動を行ったため、1593年に制定された「国教忌避者処罰法」によって、1660年11月に逮捕された。そのころまでにバニヤンは、バプテスト派の説教者として危険視されていた。しかも、逮捕されてもなお説教をすることをやめないという姿勢を変えなかったため、長期にわたって収監されることとなったのである。彼は実に12年の歳月を、拘束されて過ごした。ただし、当時は、現在の「プリズン」という言葉のイメージとは異なり、収監されてい

でもある程度の外出や外部との交流が可能であった。1672年までの獄中生活において、バニヤンは執筆活動に積極的に取り組んだ。本論考では、バニヤンが収監されている間に書いた『天路歷程』を中心とする作品群を、プリズン文学として扱っていききたい。¹⁾

プリズン文学がジャンルとして認知され研究対象となった歴史は浅いかもしれないが、該当する作品自体は非常に古くから存在する。ヨーロッパにおいては古代ローマのボエティウス (Anicius Manlius Severinus Boethius, c.480-524/525) による『哲学の慰め』(*On the Consolation of Philosophy*) を早期の例として挙げることができる。²⁾ 執筆時期は、ボエティウスが亡くなる直前の西暦524年あるいは525年とされる。英国では近世に入ってからプリズン文学が定着していった。16世紀から17世紀の英国では、政治的或いは宗教的な理由で投獄された人物が獄中で筆を執った例が顕著に見られるようになる。冒険家であり作家のサー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh, 1554?-1618) の例を挙げてみよう。彼は1603年、国王暗殺を企てたという反逆罪で終身刑を宣告され、ロンドン塔に監禁された。ローリーはエリザベス女王から大いに寵愛を受けたこともあった人物であるが、女王が崩御したあと1603年に新たに即位したジェイムズI世からは冷遇された。13年間の拘束生活において、ローリーはロンドン塔の蔵書を用いるなどして『世界の歴史』(*The History of the World*) を執筆し、1614年に出版している。『世界の歴史』はフォリオ判で700ページを超える大作である。このことは、獄中においても執筆活動が十分に可能であったことを示している。また別の例を挙げれば、1640年代に、王党派詩人リチャード・ラブレス (Richard Lovelace, 1618-1657) が獄中で書いた詩「プリズンより、アルテアに宛てて」("To Althea, from Prison") は人口に膾炙した。つぎの一節(第4連) はとくによく知られている。

Stone walls do not a prison make,
Nor iron bars a cage;

Minds innocent and quiet take
That for an hermitage;
If I have freedom in my love
And in my soul am free,
Angels alone, that soar above,
Enjoy such liberty.³⁾

石の壁に囲まれた場所であるからといって、そこがプリズンとなるのではないし、鉄格子があれば、そこが檻となるわけではない。すなわち、人間の魂は、物理的・身体的な拘束によって囚われるものではないとうたっている。ラブレスは王党派詩人で、この作品を執筆したときは違法な政治的・宗教的活動をしたとみなされ投獄されていた。⁴⁾ 上記のように、著者が身体的拘束を受け精神的に抑圧された状態にありながら執筆を行ったもの、あるいは獄中での経験の記録がプリズン文学の特徴の一つである。

バニヤンは『天路歷程』以外にも、獄中において作品を執筆している。『有益な瞑想』(*Profitable Meditations*) は186連からなる四行詩で、バニヤンが投獄されて間もなく1661年に出版された。のちの1665年に発表された「プリズンでの瞑想」("Prison Meditations") においては、物理的な自由に対する精神的な自由の優越がこの第5連、第6連にも描かれている。

I am, indeed, in prison now
In body, but my mind
Is free to study Christ, and how
Unto me he is kind.

For though men keep my outward man
Within their locks and bars,
Yet by the faith of Christ I can
Mount higher than the stars.

『天路歷程』については、バニヤンが獄中で執筆を始めたと言われるが、実際に出版されるまでには時間を要した。世に出たのは1678年であって、著者がプリズンから解放された6年後のことで

あった。作品には投獄された人間の姿が数回描写されているのだが、それらにはバニヤンの経験が重なり、著者の自伝的な要素を否定することはできない。『天路歷程』においては異なる理由で拘束され、解放される（あるいはされない）人々が登場するが、このことに言及する狙いは何であったのか。1660年から1672年までの12年間、バニヤンは獄中にありながら主要作品を次々と執筆し、世に送り出していった。この原動力は何であったのだろうか。

1. プリズン文学と『天路歷程』

バプテスト教徒のバニヤンは、上記のように宗教的統制が厳しくなった王政復古後、1660年から約12年間ベッドフォードの監獄に投獄された。彼の「プリズンでの瞑想」は1663年に出版された『キリスト者の行い』（*Christian Behaviour*）の巻末に収録された。作者は"John Bunyan, prisoner"と書かれている。明らかに自身が獄中にあることを読者に対して示そうとした意図がうかがえる。同じ年、バプテストのジョン・グリフィス（John Griffith）も"Prison Meditations"と題する詩を発表していて、タイトルページにはグリフィスがニューゲイト監獄でこの作品を執筆したことが明記されている。さらに1666年にはクェーカー教徒ウィリアム・ベニット（William Bennit）の"Some Prison Meditations"が刊行されている。1660年代のこの時期、迫害された非国教徒がプリズンの内から外へと盛んにメッセージを送り出していたことがわかる。英国国教会にコンフォームしない態度を取った彼らには常に迫害や弾圧の危険がつきものであったが、文書によって声を上げるという活動はますます積極的に行われた。

バニヤンが獄中で読んでいた書物は、聖書とジョン・フォックス（John Foxe, 1516/1517-1587）の『殉教者列伝』（*Book of Martyrs*）の2冊だとされる。これら双方が、迫害を受け投獄された信徒の声や姿を伝えるものである。バニヤンがひたすら読んだ聖書においては、キリストの弟子パウロが自らの経験をもとに綴った手紙は一種

のプリズン文学とみなすことができる。たとえばパウロがプリズンから解放された後に書いたとされるコリント人への第2の手紙、第1章3節から11節までに注目してみよう。⁵⁾ この部分は、清教徒側の過激な活動家であったウィリアム・プリン（William Prynne, 1600-69）が、自身のプリズン文学作品（*Comfortable cordialls against the discomforts of imprisonment*, 1641）のタイトルページに引用している。とくに第8節からの部分でパウロは投獄の経験を振り返り、耐えがたい仕打ちを受けたとき神によって救出されたことに感謝をささげている。国教会と対立する過激思想によって屈辱的な処罰を受けてきたプリンも同じ思いであったに違いない。

バニヤンが愛読したというフォックスの『殉教者列伝』は、カトリックからの迫害を受けて殉教したプロテスタント信徒の生涯を扱っている。伝統的な聖人伝とは異なり、必ずしも世の中で名の知れた人物ではなく、ごく一般の男性、そして男性に限らず女性をも扱った作品である。この『殉教者列伝』は1563年に英語版が出版されると、チューダーからスチュアート期の英国で広く受容された。版画挿絵によって処刑の場面が描写されていたことから、文盲の人々あるいは子どもも含め、多くの人々の宗教思想の形成に働きかけることとなった。バニヤンの作品にも少なからずその影響が見られる。

さて『天路歷程』は主人公である巡礼者（Christian）が天の都を目指して旅をする物語である。ヨハネによる福音書14章6節では、イエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。（I am the way, the truth and the life.）」と言ったと書かれている。イエス・キリストの道は信仰の道であり、天国に続く道である。ただしそれは長い道のりであり、しかも巡礼者の旅の手段は徒歩であるから、なおさらのこと難儀である。苦しみながらもこの道を歩んでこそ、天の都に到達することが可能となるのだが、旅の途中では、さらに巡礼者を苦しめるプリズンの経験が語られる。

バニヤンは『天路歷程』の中で、牢獄に囚われた人間を複数回描いている。具体的には、旅の前

半、解釈者(Interpreter)の館で主人公クリスチャンは鉄の檻(iron cage)の中でうずくまる男に引き合わされ、言葉を交わす。虚栄の町ではクリスチャン自身が友人の信仰者(Faithful)とともに投獄されてしまう。さらにそのあと、絶望巨人に囚われ、クリスチャンは友人待望者(Hopeful)とともに地下牢に閉じ込められてしまう。

この3例のうち、最初の(解釈者の館の)例だけは主人公クリスチャン以外の人物の状態を描いている。解釈者はクリスチャンがこの先巡礼の旅をして天の都に入るまでの間に役に立つような有益な事柄、宗教的教訓を示してくれる人物である。とすると、解釈者は鉄の檻の中の男性からクリスチャンに何を学ばせようとしたのであろう。バニヤンはこの男が登場する部分冒頭でテキスト欄外に注を付けている。そこには"Despair like an iron cage"とだけ書かれており、「絶望」が牢獄を理解するキーワードとなることがわかる。ここでいう「絶望」とは、死後の救済への希望の喪失を意味する。まずこの檻の中の男性が語るには、彼はかつて立派な信仰告白者であったし、救済を信じていた。しかし、信仰の道から外れ、いまでは心が頑なになって救済の望みを失っているということである。すなわち真っ暗な部屋の鉄檻に囚われたこの男性は、地獄に行く運命を確信し、恐怖に苦しんでいる。

バニヤンは、ページの本文テキスト欄外に、関連する聖書の部分を参照できるよう注を頻繁に付けているのだが、オリジナルテキスト欄外の注では、「ルカによる福音書の11章13節」と書かれていて、すなわち「種(神の言葉)を蒔く人のたとえ」がその部分にあたる。そこには、「石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである」とあり、この鉄の檻に入った男性の姿を重ね合わせることができよう。彼自身、信仰の道から外れ、神の怒りに触れる行為を繰り返し、神に捨てられたと認めている。彼にとっての「試練」とは現世的欲望による誘惑であったが、信仰心の弱さから試練に打ち克つことができなかったのである。

檻の中の男性と言葉を交わすこの場面で主人公クリスチャンは、これほど罪の意識に苦しむ者に対して、なぜ神の赦しがないのかということに疑問を覚える。それをたずねると男性は、神に対する度重なる冒涇によって、神から見放されてしまったことを打ち明ける。ちょうどヘブライ6章4節から、「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、その後墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです」と書かれている通りである。もはや救済の希望はないと決めつけている人間の頑なな心を変えることは難しい。檻の中の男性は過去を振り返り、次のように語る。

For the lusts, pleasures, and profits of this world; in the enjoyment of which I did then promise myself much delight; but now everyone of those things also bite me and gnaw me like a burning worm.

「現世の欲望、快楽、利益のために、その当時はそれを楽しむことを自分に約束していたが、今はそれらのものが皆、火のついた虫のように私に噛みつき、私を苦しめるのです」と、虫のたとえを使い、苦悩する心境を説明している。解釈者はクリスチャンに対して、この男のようになってはならぬと忠告する。先にも述べたが、解釈者はクリスチャンがこの先巡礼の旅をして天の都に入るまでの間に役に立つような有益な事柄を示してくれている。すなわちここでは、かつて信仰の生活において華々しいときを過ごした者でさえも、いったん道を誤れば救済を得られなくなってしまうという教訓を与えている。さらに、この男のように繰り返し罪を犯すことによって神から見放され、檻に閉じ込められたように絶望の状態から逃れられなくなることを、信徒は回避しなければならないと伝えている。信徒に対するごく一般的な戒めであったことは間違いない。そして同時に、

これは同時代の読者にとってはむしろ身近であったかもしれない、実在のケースを念頭に置いての場面でもあっただろう。檻の中の男性については、元は同じベッドフォードのバプテスト教会の仲間、バニヤンと親しくしていたジョン・チャイルド（John Child）という人物が重ね合わせられている。⁶⁾ 彼は王政復古後に英国国教会に転向し、いわば「背信者（Apostate）」となった。しかし数年後にチャイルドは自身の魂の中における英国国教会と非国教会の板挟みに苦しむようになった。そして鉄の檻の男のように絶望に囚われるようになり、心を病んで最終的には自らの命を絶った。バニヤンは同じ教会の仲間であった頃にはチャイルドと活動をともにしていたし、のちに病に苦しんでいた彼を訪問したとされている。バニヤンはチャイルドの苦しみを実際に目撃し、絶望という鉄の檻に囚われた男性を描いたと考えるのは自然であろうが、執筆年代との時期のずれがある。むしろこの鉄の檻の中の男性は、17世紀の英国で「背教者（Apostacy）」として広く知られていたフランシス・スピラ（Francis/Francesco Spira, 1502－48）によく似ている。スピラはイタリアの法律家で、カトリックからプロテスタントに改宗、しかしカトリック教会からの圧力を受け、プロテスタントの教義を棄てた。その後、彼は精神的に追い詰められて自死を遂げた。その生涯はヨーロッパにおいて大変関心を持たれ、幾多の書物となって広まっていった。英国ではマテオ・グリバルディの著作の英語訳が1550年にすでに紹介されている。ただし、より広く受容されたものは1638年に出版された書物（Nathaniel Bacon 著、*A relation of the fearefull estate of Francis Spira, in the yeare, 1548*）であり、これはたちまちベストセラーとなって18世紀にいたるまで版を重ねた。なお、チャイルドの没後には、同じ「背徳者」として彼の生涯もこの本に増補され、スピラとともにチャイルドは「絶望」に囚われ自ら命を絶った人間を代表するようになった。いずれにせよ、この獄中の男性についての記述は、17世紀英国で人々の関心を引いていた「絶望」と「背教」をテーマとする宗教系文学に影響

を受けているとすることができる。スピラについて読んだ経験を、バニヤンは自伝的作品『罪びとのかしらに溢れる恩寵』（*Grace Abounding to the Chief of Sinners*, 1666）の第163節において次のように語っている。

About this time, I did light on that dreadful story of that miserable mortal, Francis Spira, a book that was to my troubled spirit as salt, when rubbed into a fresh wound; every sentence in that book, every groan of that man, with all the rest of his actions in his dolours, as his tears, his prayers, his gnashing of teeth, his wringing of hands, his twisting and languishing and pining away under that mighty hand of God that was upon him, were as knives and daggers in my soul;

「この頃、私はあの惨めな人間、フランシス・スピラの恐ろしい物語に目を留めた。この本は、私の悩める精神にとって、生傷に塗る塩のようなものだった」と書いていることで、バニヤンとこの書物との出会いが明確に示される。そして、「その本の中のすべての文章、その男のすべてのうめき声、彼の涙、祈り、歯ぎしり、絶望して手をもみあわせる様子、彼の上にあった神の強き御手の下でもがき、嘆き、消耗していく、その悲しみの行動のすべては、私の魂にとってナイフや短剣のようだった」と、極めて具体的にスピラの経験から受けた影響を記している。バニヤンはスピラの悲惨な生涯について知ることになり、それを自分にとって非常に身近な脅威として感じていたことがわかる。自分にとっての脅威、それは全ての信徒にとって共通の脅威であったに違いなく、ゆえにバニヤンは、神の怒りに恐れおののき絶望に囚われた檻の中の男性を描かずにはいられなかったのではないか。

2. 投獄と解放

『天路歷程』における別の例を取り上げてみ

よう。クリスチャンの巡礼の旅も半ばあたりまで進んだころ、クリスチャンと友の「信仰者」(Faithful)は「虚栄」(Vanity)という名の町にたどりつく。そこは古くから店が立ち並んでいる市場町である。「虚栄の市」(Vanity Fair)という名の通り、そこでは数々の空しい世俗的な商品が売られている。

Therefore at this fair are all such merchandise sold as houses, lands, trades, places, honors, preferments, titles, countries, kingdoms, lusts, pleasures, and delights of all sorts, as whores, bawds, wives, husbands, children, masters, servants, lives, blood, bodies, souls, silver, gold, pearls, precious stones, and what not.

例えば上記のような物(家、土地、商売、地位、名誉、出世、称号、国、王国、欲望、快楽、あらゆる類の悦び等々)が、巡礼者の心を惑わすために取引されている。しかしクリスチャンも信仰者もその地で売られているものに興味を示さず、身なりも異なり話も通じない。彼らはいわば異邦人であったため、その町では騒ぎが起こり、二人は地域の治安を乱したことによって投獄されてしまうのであった。17世紀当時、ピューリタンは地味好み衣服と独特の話し方に特徴があり、容易に判別が可能であり、嘲笑や攻撃の対象となった。バニヤンが描くこの町での出来事は現実味があり、まさにピューリタンが迫害される様子を描いたものとなっている。

実はこの町に至る前、クリスチャンたちは予言を受けていた。それは、物語を通してクリスチャンの導き手となる福音伝道者(Evangelist)から、虚栄の町において、クリスチャンたちが生命を失う危機に瀕し、いずれかひとり、あるいは両名が命を落とす可能性があるという内容であった。⁷⁾福音伝道者の予言を聞いたクリスチャンと信仰者は、その先で起こるとされた出来事にひるむどころか、もし彼らの一方が命を失うとしたら、自分がそうありたいと願い、勇敢に試練に立ち向かい、

神の意向に従おうとするのである。その理由は、福音伝道者が言うように、先に旅立つ者は、天の都に先に到達することができるだけでなく、続く旅の道中で遭遇する恐ろしい災難を免れることができるからである。

予言された通り、虚栄の町で二人は見世物のように牢屋に囚われる。辱めにあっても彼らは決して信仰心を変えることがなく、辛抱強く落ち着いた振る舞いをしていた。するとそれを見た住民の中には、彼らに心を動かされる者さえ出てきたのだが、そのことがかえって状況を悪化させ、いよいよクリスチャンと信仰者は死刑に処せられることとなる。罪状は、虚栄の市の商売を妨害したこと、地域に騒動と分裂を引き起こしたこと、独自の危険思想により仲間を作ったことであった。信仰者は不条理な裁判により処刑されてしまうのだが、虚栄の町での一連の出来事は、空想と言うよりは、実際に清教徒バニヤンが王政復古期に経験したこと、目の当たりにしたことを基にしたものだろう。クリスチャンと信仰者はこの短いエピソードの中で何度も牢屋に入れられたり引っぱり出されたりしている。宗教的活動の結果、見せしめとして引き回されたり、裁判にかけられたりするが、これはバニヤンのような王政復古期の非国教徒が味わうことになった経験である。プリズンという場所についての具体的描写はこの場面ではほとんどないのであるが、獄中のクリスチャンと信仰者は互いに慰め合い、支え合った。身体的に拘束はされていても、二人が絶望に囚われることはなかった。そしてもうひとつここで注目したいのは、処刑の方法である。これは非常に具体的かつ残忍な方法であり、引用するのも憚られるが、バニヤンはフォックスの『殉教者列伝』に記された過去の例についてよく知っていたのだから、信仰者の処刑の描写に関してはフォックスからの影響が大きかったと判断される。バニヤンは、カトリックから迫害を受けたプロテスタント教徒の殉教を記録したフォックスとは直面した状況は異なるものであったが、共通して宗教的弾圧の非情さ、残酷さをありありと示している。

このように、虚栄の町の人々と違った言葉を話

し、服装も異なる様子であるため、巡礼者の二人はまず警戒され、さらには虚栄の市で取引されるものに何ら興味を持たなかったことで非難を浴びた。拘束された二人は裁判にかけられても決して自らの考えを曲げることはなかった。そうして信仰者は処刑され命を落としてしまったので、身体的拘束から解放され牢を出て自由の身になるという展開にはならなかった。ただ、彼は殉教者となることによってクリスチャンよりも先に霊的な自由を獲得し、迎えの手によって天の都に導かれて行った。このことは、虚栄の町に入る前に福音伝道者から予言されていた通りであったし、実はクリスチャンも信仰者も密かに先に旅立つことを願ったのである。信仰と、殉教への憧憬のようなものが、死への恐怖に勝っていることが示されている。「プリズンでの瞑想」第18連においても、それと似た心情が表れている。

The prison very sweet to me
Hath been since I came here,
And so would also hanging be,
If God would there appear.

天上から馬車が信仰者を迎えに来ていたことで、亡くなった彼が神のもとへ速やかに旅立つことが暗示される。つまり、信仰を貫いた信仰者は、永遠の命を得たことになる。一方のクリスチャンはそのときに処刑をいったん免れ、牢へと戻された。しばらくそこで過ごした後、そこを脱出することができた。詳細は書かれないのだが、一連の展開は神の計らいによるものであったとされる。クリスチャンは虚栄の町を去るときに歌を口ずさむのだが、「歌い、その名を生き残らせよ。あの者たちは君を殺したが、君は生きているのだから (Sing, Faithful, sing, and let thy name survive; For though they kill'd thee, thou art yet alive!）」という歌詞は、殉教による死は永遠の生命を得ることを意味している。このことは『殉教者列伝』に記録されたプロテスタント殉教者たちが、書物を通して生き続けているというバニヤンの実感によるものかもしれない。

つぎに、『天路歷程』の後半部分において、再び主人公クリスチャンがプリズンに囚われる場面を取り上げてみたい。クリスチャンは虚栄の町から脱出したのち、待望者 (Hopeful) という名の新たな友人を得て旅を続ける。そして、今度は絶望巨人 (Giant Despair) につかまり、打ちのめされ、あやうく殺されそうになる。⁸⁾ 解釈者の家で言葉を交わした鉄の檻の中の男性は「絶望の人 (man of despair)」であったのだが、ここで再び「絶望」という名前が登場する。投獄された理由は、クリスチャンと待望者が道に迷ったあげく、意図せずに絶望巨人の領地に侵入してしまっていたためであった。

虚栄の町の牢獄と比較して、疑念の城の地下牢 (dungeon) についての描写は、より具体的である。そこは「二人の魂にとって、大変暗く、汚く、悪臭のする地下牢 (a very dark dungeon, nasty and stinking to the spirits of these two men)」であった。このようなプリズンのリアルな描写の背景には、獄中にあった著者自身の実際の経験があったと考えることができよう。

絶望巨人は力が強く、抵抗するクリスチャンと待望者の二人を自身の城へと連行し、地下牢へと閉じ込める。彼は非常に暴力的であり、クリスチャンと待望者に対して執拗に乱暴な仕打ちをする。彼らは鞭で打たれ、ひどく殴られて、心身を痛めつけられることになる。また、絶望巨人は二人に十分な食事や水を与えず、飢餓の苦しみさえも味わわせて、足枷を付けて解放／救済の希望を失わせ、しまいには二人に自殺を勧めるようになる。するとクリスチャンは、生きていてもこのように苦しみで苛まれるばかりなら、いっそ自ら命を絶ったほうがよいのではないかと考えるようになってしまう。⁹⁾ クリスチャンがここで自殺をとどまるのは、友人の待望者がいたからである。彼が同じ地下牢の中でクリスチャンを励まし続け、救済への希望を持ち続けるよう説得する役割を果たしている。絶望巨人による連日の暴行にも耐えて、二人は祈り続け、最後には牢の門を開けるための「約束」という名のカギを携えていたことに気づく。使徒言行録に登場するパウロとシ

ラスのように、投獄されて責苦に遭っても、懸命に救いを信じ、解放されたのである。二人はようやく地下牢から脱出する術を見出し、無事に疑念上の敷地から離れることができたのだった。道を外れて迷い込み、絶望に襲われ死を意識するほどの苦難に遭ったのだが、プリズンから自由の身になるためのカギは元から身に付けていたものである。つまり、救済は以前から約束されていたものであり、解放に至るために必要なのは、絶望に屈せず信仰を堅持する力であった。

むすび

17世紀前半の詩人ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) は、宗教詩『聖なるソネット』(*The Holy Sonnets*) の一編の作品において、神に呼びかける形で、"Take me to you, imprison me, for I / Except you enthrall me, never shall be free" という一節を書いている。投獄のイメージを使って、神と詩人が、拘束する者とされる者として描かれる。投獄されなければ自由にはなれないという逆説的な表現は、パウロの言う「キリストの囚人」(フィレモンへの手紙、冒頭部分) を基にしているだろう。ダンも国教会の司祭でありバニヤンとは宗教的立場が異なっていたが、二人は共通して、投獄(あるいは拘束)と自由(あるいは解放)という相反するイメージを用いて、自由を得るためには囚われなければならないと書いている。ただし明らかにバニヤンの場合は囚われたあと解放されることで自由の獲得が完成するのである。

ジョン・バニヤンによるプリズン文学は複数の作品を例に挙げることができるが、本論考においては『天路歷程』を中心に扱ってきた。作品の中でバニヤンは3度、投獄された人物の描写を行っている。バニヤンはフォックスの『殉教者列伝』や聖人伝に影響を受けながらも、独自の方法で拘束された人間の描写を行った。宗教的弾圧を受けて命を落とす者を英雄視してその姿を描いたのではなく、たとえば虚栄の町では、抑圧する側にある者に対して声を上げて、対抗する姿勢を見せたのである。このように、読者への教訓や警告という意味に加えて、同時代の宗教的弾圧への抗議を

も読み取ることが可能である。バニヤンのプリズン文学は、宗教生活における教訓を与えるだけでなく、17世紀英国において精神的抑圧、肉体的な拘束に屈することのない信仰者の姿を現代に伝えるものである。そして、実際に苦難を目撃し、経験した者による魂の記録であるとみなすことができる。

〔謝辞〕

本研究はJSPS科研費19K21631 および22K18473の助成を受けたものです。

注

1) プリズン文学には、著者が獄中で記した作品や、獄中での経験を基にした作品、あるいはプリズン自体をテーマにしたものが含まれる。国外では、古今東西のプリズン文学についての考察が発表され、研究プロジェクトが展開されているが、日本国内においては17世紀英国プリズン文学に注目した研究は未だ例がないと言ってよいだろう。17世紀英国プリズン文学を中心に扱う研究については、Thomas S. Freeman, "The Rise of Prison Literature" *Huntington Library Quarterly*, Vol. 72, No. 2 (June 2009), pp. 133-146 (University of Pennsylvania Press)などを参照。また、プリズン文学は広く世界中に存在してきたものであり、近世日本における同種の作品群との比較研究も行われるべきであると考えている。今後考察を進め、別の論考において取り上げていきたい。

なお、バニヤンの作品については、主に以下のエディションを参考にした。

The Pilgrim's Progress (facsimile reprint of 1st ed.: Dugim, 1975), *The Miscellaneous Works of John Bunyan*, edited by Roger Sharrock (Oxford University Press, 1976), *The Works of John Bunyan*, edited by George Offor (3 vols, London and Edinburgh, 1852), *The Pilgrim's Progress*, edited by Roger Sharrock (Penguin, rpt. 1987), *The Pilgrim's Progress*, edited by Neil Keeble (Oxford, 1984; 1998), *Grace Abounding to the Chief of Sinners*, edited by W. R. Owens (Penguin, 1987). また、引用では基本的に現代のスプリングを使用することとした。

- 2) "Whatever the motive of the 'Consolation' may have been, it remains a very noble book, and is, for me at least, by far the most interesting example of prison literature the world has ever seen." Hugh Fraser Stewart, *Boethius, an Essay* (Edinburgh and London: Blackwood, 1891), p. 107. これは "prison literature" という語が使用された早期の例でもある。
- 3) Richard Lovelace の作品については、*The Poems of Richard Lovelace*, ed. by C.H. Wilkinson (Clarendon, 1930) を参照。
- 4) バニヤンと同じ清教徒による作品例として、ジョン・ミルトンの『闘士サムソン』(*Samson Agonistes*) を挙げておく。ただしこれは、作品の著者ではなく主人公がプリズンに囚われているもので、必ずしも既に言及した他の例と一致しないが、プリズン文学の一種とみなすことができよう。1671年に出版されたこの劇詩において、もともと旧約聖書「士師記」に登場する主人公サムソンは、ガザで牢に入れられ、労働を強いられた囚人である。
- 5) (コリント 2, 1:3-11 以下、数字は節の番号) 3 わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。4 神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。5 キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。6 わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。7 あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。8 兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。9 わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。10 神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これから救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。11 あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、
- 多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。(新共同訳より)
- 6) Neil Keeble による注を参照。John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*, (Oxford, 1984; 1998), p. 268.
- 7) パウロは使徒言行録 (Acts 20:22-24) において、のちに災難に遭い、投獄される、という予言を聖霊から受けており、そのことは実際のものとなった。
- 8) ミルトンが描いたサムソンは、地下牢に投獄されただけでなく、視覚を奪われ、労働を課せられている屈辱的な状態に陥れられた。気持ちでは決して屈してはいないサムソンであったが、盲目の囚人となった自身の境遇、惨状を嘆いた。プリズンから出て、復讐することはできても、彼が身体的な自由、光を奪還することはなく、結局は悲劇的な結末を迎える。サムソンの場合はその怪力によって数千人以上の人間を殺めており、その怒りや暴力が生々しく描かれているため、彼を殉教者として、『天路歷程』の信仰者 (Faithful) と同列に扱うのは難しい。
- 9) 前述したフランシス・スピラもジョン・チャイルドも、絶望して自ら死を選んでいる。